

発表者名：佐藤 健一

所 属：関西リハビリテーション病院 リハビリテーション科

抄録タイトル：家庭医による航空機内医療のレクチャーへの取り組み
～その重要性と今後の課題～

【目的】

航空機内で医師や医療関係者が緊急事態（Dr Call）に遭遇する可能性は常にあるが、搭載している医薬品・医療器具を知る機会ほとんどない。自分自身が航空機内でDr Callに対応した経験より、事前に知識として知っていることの重要性を実感し、航空機内医療についてのレクチャーを実施している。今回、”航空機内医療”のレクチャーによる知識と経験の普及への取り組みを紹介するとともに、参加者のアンケートから今後の改善点を検討する。

【方法】

毎年秋に大阪で開催される「家庭医の生涯教育のためのワークショップ」とその「サテライトワークショップ」内においてレクチャーを合計3回実施した。参加者にはレクチャー後にアンケートを行い、航空機内医療についての意識を評価した。ワークショップは90分で、内容としては(1)地上と機内環境の違い、(2)Dr Callの知識、(3)機内で遭遇しやすい病態、(4)搭乗前後の配慮 を扱った。機内でのDr Callに特化せず、急変の潜在的リスクを持っている慢性疾患患者に対してアドバイスが出来るような内容も盛り込んで全体を構成した。

【結果】

総参加者127名のうち、アンケートは103名（返答率81.1%）より回答が得られた。アンケート結果では、レクチャーに参加し、講義を聞くことで航空機内医療を理解する事ができ、参考になったという返事が大部分であった。また、実際に遭遇した際、対処する際にも参考になるとの返答が多かった。しかし、具体例を示してほしい、実際に搭載されている医薬品や医療器具を見たい、といった要望があるなど、航空会社外の医師のみでレクチャーを実施するには限界があることも判明した。

【結論】

航空機内など特殊な環境での医療において、事前に使用できる医薬品・医療器具、遭遇しやすい疾患などの知識を持っていることは、実際に遭遇した際には有効に活用できると思われる。しかしながら、関心のある医師に対して実施できる環境ではないこと、航空会社に勤務していない医師が講師を行うため、参加者が求めていたと思われる内容に必ずしも合致しないこと、このようなレクチャーを継続していくためには、航空会社の協力を得られるかが今後も重要かつ課題であることが分かった。